

■□ まとめ

加賀美 太記 (就実大学准教授)



皆さま、たいへんお疲れ様でした。今年のシンポジウムはいくつもの事実について、いくつもの視角や立場からご報告をいただきました。そのため、とても情報量の多いシンポジウムになったかと思います。

皆さまは現場で活躍なさっていますので、ご存じのことかもしれませんが、これまでご存じでなかったこともあろうかと思っています。今回、現場の事実や周りの暮らしの実態をたくさん知っていただく機会にできたことは、企画を考える運営委員としても非常によかったと考えております。

というのも、現場の実態やいまの自分の隣の暮らしは見えているかもしれませんが、少しでもズレると見えにくくなるというのが現状だと思うからです。われわれ大学教員も、とても小ざれいに身なりを整えた学生たちと日々会っていますが、いざゼミが終わった後に「ごはんに行きましょうか」とか「打ち上げをしましょう」という話しになると、みんなの前では特に何も言わないのですが、後で「先生、じつはお金がなくて行けないんです」と言ってくる学生がいるのが実態です。

まだ信頼があるからそう言ってもらえるのであって、そういうことを言えない学生も大勢いるのだと思います。その意味では、実は私も目の前にいる学生たちの暮らしぶりが見えていないのかもしれませんが、したがって、暮らしを考えるとときには、自分たちの目の前の現実だけでなく、見えていない部分や、あるいは最初のお話にあったように、「見たくない」というか、

見えないふりをしているような実態に意識を向けていく必要があるだろうと思っています。

そういった機会のひとつ、あるいは「そういうことも大事かもしれない」と考えていただくきっかけとして、本日のシンポジウムが皆さまの中で位置づいていれば幸いです。また、そうしたなかで、どのように生協や協同組合が向き合っていけばいいのかということについてのヒントも今日はいろいろとお話をいただけたかと思っています。

キーワードとしては、現場で知ってもらったり、知ろうとすることだったり、最後に松尾先生もおっしゃっていましたが「地域」というキーワードであったかと思っています。また、協同組合の枠をどう越えていくのかということもご提案いただきました。全体として何か一つの解が見つかったわけではないと思いますが、ぜひ今後の各単協や連合会、もしくはそれぞれの現場において、自分たちに何ができるのか、どんなことをしていけばいいのかということを深めていただけたらと思います。

ご報告者の皆さまには非常に前向きなご報告をいただいておりますので、テーマは重苦しいものでしたが、前向きに頑張ろうという元気もいただけたかと思っています。ぜひ、そうした部分もお持ち帰りいただければ幸いです。

以上、本シンポジウムのまとめとさせていただきます。ありがとうございました。